令和6年度 第3回学校運営協議会 報告

1 日 時 令和6年11月7日(木) 午前9時30分から11時30分まで

2 会 場 本校 会議室

3 出席者等

(1) 学校運営協議会委員(欠席者※)

【委員①】元特別支援学校長(地域コーディネーター)

【委員②】中村町自治会長

【委員③】静岡市大里生涯学習センター長

※【委員④】ありんこの里管理者

【委員⑤】本校PTA副会長

【委員⑥】小糸製作所人事部人材開発課

(2) 校内教職員

校長、副校長、事務長、各学部主事、地域支援部長、教務課長

4 会議次第

(1) 開会

(2) 校長挨拶

(3) 協議等

(4) 学校応援活動

(5) 閉会

5 協議等内容

(1) 校長挨拶

- ・先日学校公開が2日間行われ、多くの来校者に授業を参観いただいた。また、現在は2週間後に控えた学習発表会の準備に取り組んでいる最中で、校内はとても活気あふれる状態である。今日は学校経営計画について前期の評価と後期の取組み報告や防災対策についての協議などがあるが、皆さまの忌憚のない御意見をいただきたい。また、皆で作る学校を目指し、学校応援団の皆さまの力をお借りしたいと思っている。

(2) 協議等

ア 9月～10月の学校経営計画に関わる取組報告

- ・前期学校評価アンケートより【校長：別紙を提示】

これまでの評価は教員側の視点が多かったが、今年度よりすべて子どもの姿に視点を移した評価とした。そのため、評価指標を子どもが理解できる文章とした。前期教職員評価では「わからない」と回答した数が多いが、これは担当部署ではないため回答することが困難であるとの理由が大半であった。しかし担当部署ではなくとも、学校全体として共通理解を図ることが大切であるため、後期は回答の仕方に改善を加えたい。

「学校作りに参画する経験を楽しむ」欄の中学生による評価が高かったことから参画する意識が高まっていると感じる。これらの回答結果を子どもにフィードバックし、更に意識が高まるようにしていきたい。また、通級生の項目によっては、児童生徒保護者の欄が空欄である。このことについては、回答済みだが、学部内で取りまとめ中のため、次回示す予定である。

イ 全国ろう学校PTA連合「家庭教育を考える部会2024年東京」参加の感想【委員⑤】

- ・グループワークでは、「難聴児が社会で求められる力とは」について話し合った。障害者であるから周囲から優しくしてもらうのは当たり前という意識から、自分で切り開いてい

く意識への変化が必要だと感じた。

- ・グループワークのもう一つのテーマ「コミュニケーションに音声はあったほうが良いか」については、「手話のみでも良いのではないか、音声はなくても良いのでは」という意見が多数上がったが、音声も必要ではないかと感じることもあり、答えに正解はないと思った。
- ・幼稚部のときのかかわり、小さい頃からのかかわりがとても大切であると思った。静岡県は人工内耳推奨県だと感じる一方、他県の様子を見たり聞いたりすると地域差を感じた。また、医療の質や地域差を実感する講演内容だった。そして、義務的にではなく、意欲的に参加している保護者が多く、その積極性に驚かされ、刺激を受けた。

ウ 学校公開参加者の感想【委員③】

- ・校内が清潔で、掲示物の充実度が高い。また、掲示物の内容から子ども達の学習の様子がよくわかった。中学部2年生の授業では、合理的配慮について学習していて、生徒が自分の言葉で詳細に説明していたことが印象的だった。

エ 中村町自治会長から地域交流について【委員②】

- ・「よんもくカフェ」とは、地域のお年寄りの集う会で、今年度小学部中学年の子ども達と交流を行っている。児童一人一人が将来社会で活躍できる人になれるよう、今からコミュニケーション、人とのつながりを大切にしてほしいと願いながら活動を企画している。相手の立場になって考えることや気持ちを読み取ることができるよう、交流活動を今後も続けていきたい。

オ 各部主事から取組報告【各部主事】

- ・幼稚部：行事の精選により、子どもが発表する場が昨年度より減少した。後期は意識的に発表の場を設定していく。保護者支援については、これまでは付き添いが原則だったが、家庭の事情や時代の流れ等を考慮すると、改めて今後検討していく必要がある。また、地域とのつながりでは、先日稲刈りを実際に見学した。今後はふれあいサロンでの交流を計画している。
- ・小学部：「自分の良さに気づき、互いを尊重しながら学校生活を送ることができる子」、「自分の心と体が成長していることを感じている子」、「学校生活を通して、豊かな言語力が身につけている子」の3点を目指す児童の姿としているが、この3点共に概ねできたとの学部教員評価であった。このように手応えを感じる反面、課題もまだあるので、後期はコミュニケーションスキルのアップにさらに力を入れて取り組みたい。
- ・中学部：多様性と人格を認め合う生徒を目指し、今年度は話し合い活動に力を入れている。先日の職場体験では、体験を通して、与えられた仕事やかかわる人々とのやりとりを受け入れていく重要性を生徒が感じていた。
- ・地域支援部：主に教育相談や在籍校訪問等でニーズに応じた情報提供を行った。情報提供を行うことにより保護者や在籍校担任の理解は深まってきたと感じるが、まだ十分に情報が伝わり切れていないこともあるので、引き続き丁寧に対応していきたい。

カ 各分掌課取組報告（別紙）

キ 委員からの感想等

- ・アンケートの見方について、E評価の「わからない」を回答の合計に含めるべきなのかどうか。「わからない」イコール「取り組んでいない」と捉える等E評価の扱い次第で目指す姿の達成か否かが変化するのではないだろうか。
- ・児童生徒保護者評価の「0～3」は、教職員評価の「A～E」にあたるのか。
- ・アンケートは取り方や分析の仕方がとても大切である。
- ・コミュニケーションについて、先日会社でろう者と手話サポート者を交えて意見交換をした時、職場環境において少し食い違いが生じていたことがわかった。これまで、コミュニケーションは円滑にできていたと思っていたが、まだ不十分であること、配慮が必要であると感じた。

- ・児童生徒保護者評価の仕方が良いと思った反面、過小評価になっている所もあるのではないかと感じた。
- ・教職員の退勤時刻について 20 時完全施錠は良い取り組みだと思った。
- ・教職員の退勤時刻について、20 時完全施錠に驚いた。先生たちにはもう少し早く帰宅してもらいたい。
- ・職場体験について、受け入れる側として、礼儀やマナーは社会に出た時にとっても大切だと改めて感じた。
- ・学校評価のグラフがわかりにくく、数字の「0～3」が何を示しているのか、わかりにくかった。シールを貼るという評価の仕方はわかりやすく良かったと思う。また、親子で話し合っただけで進めることで、子どもがきちんと自己評価できたので良いツールだと思った。
- ・自分を客観的、俯瞰的にみられる力が大切だと思った。
- ・子どもの評価について、子どもが自己評価するのは良い取組だが、項目数が多いと感じた。また、親子でやり取りを通して評価を行う家庭がある一方、やり取りが困難な家庭があることも念頭におくとよい。評価対象が大人数ならばパーセンテージ表示でもよいが、本校のように少人数ならばパーセンテージ表示が必要だろうか。少人数ならではの評価の仕方、例えば個人内評価の推移（前期→後期）等具体的にやってみてはどうだろうか。そして、本人の伸びを個別に伝えてほしい。

（校長から）

- ・アンケートを取る際に、項目の担当者でなくとも、全教員に「学校全体としてみてどのように評価をするのか」との意図で回答をもらったが、全体に周知できていなかった。後期については、担当者のみの評価にするか、全体での評価にするか、検討する。
  - ・児童が家族とともに自己評価を行うことは、今年度初の取り組みであった。自己評価しやすいように、このような形をとったが、評価基準を揃える必要もあったと反省している。
  - ・皆さんからたくさんの御意見をいただいたので、検討、改善していきたい。
- ク テーマ「防災対策～いつくるかわからない自然災害に備えて、通学途上の子どもたちを見守るためにできること～」について（ふせんに記入後、模造紙に貼り付け、発表）

【提案：副校長、校長】

- ・8月の南海トラフ巨大地震注意を受けて、現在「災害発生時や荒天時の対応について」校内で検討中である。今回、このテーマについて様々な立場の皆さまから御意見や情報、アイデアを伺いたい。そしてこのアイデア等を校内で共有したり検討したりしたいと考えている。
  - ・児童生徒は広範囲から通学している。そのため、校内にはハザードマップを掲示し、児童生徒が自身の居住地をシールで示すことで災害に対する意識を深めている。
- （意見交換）
- ・いざという時の身を守る場所の確保や確認のために、近隣施設と連携を取れるようにしておくとうい。良い。
  - ・昨今、荒天時には予防的に電車を運休させる傾向がある。学校も休校措置の判断を迅速に行えるように予め確認しておく必要がある。
  - ・近隣の川の危険情報を普段から把握しておく。
  - ・学校専用アプリを作成し、災害時にすぐに閲覧できると良い。
  - ・電源バッテリーの常備をする。
  - ・いざという時に助けてもらえるよう、普段から通学バス運転士とのかかわりを大切にする。
  - ・普段から、児童生徒に電話のかけ方やメール送信の仕方などを伝える。
  - ・シミュレーションを行っておくと、災害時にスムーズに動けるのではないかな。
  - ・予想外の事態を普段から教えて、子ども自身の危険察知能力を高める。
  - ・地域と学校との日頃の付き合いの深さが、災害の時に現れる。災害の時だけではなく、普

段から地域との関係作りを大切にしていきたい。

- ・ 緊急情報を得る方法や、親や学校との連絡方法など、スマートフォンが活用できるように日頃からきちんとレクチャーをすることが大切。
- ・ 荒天時に、児童生徒が学校待機となった場合を想定して、校内環境を日頃から整える。
- ・ 南海トラフ巨大地震注意は、防災対策や意識について再考する良いきっかけとなった。一人一人が対応や備えについて考えることが大切だと思う。

(校長から)

- ・ 学校として考えていかなければならないことは多いが、この御意見や情報、アイデアを参考にしながら一つ一つ取り組んでいきたい。

(3) 学校応援活動について

委員の方々に以下の取組に参加いただいた。

ア 学習発表会への応援メッセージ作成

- ・ 「学習発表会での緊張を和らげる方法」、「子ども達への応援メッセージ」
- ・ 後日校内掲示等で子ども達に伝えること、学校教育への参画へのお礼を伝達した。